

平成 28 年度 国立江田島青少年交流の家教育事業

カッターズキャンプ実施報告書

- 【趣 旨】 キャンプ参加者に、日常では味わうことのできない体験を通して、自然を身近に体感させる。また、多くの人と共に生活する中で、積極性や思いやりの心を育て、新しい自分を発見できるようにする。
- 【主 催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立江田島青少年交流の家
青年ボランティアグループ「カッターズ」
- 【後 援】 広島県教育委員会，広島市教育委員会，呉市教育委員会，江田島市教育委員会，
府中町教育委員会，海田町教育委員会
- 【期 日】 (1) 春キャンプ 平成 28 年 6 月 4 日 (土) ～ 5 日 (日) (1泊2日)
(2) 夏キャンプ 平成 28 年 8 月 7 日 (日) ～ 9 日 (火) (2泊3日)
(3) 秋キャンプ 平成 28 年 10 月 8 日 (土) ～ 9 日 (日) (1泊2日)
(4) 冬キャンプ 平成 28 年 12 月 23 日 (金) ～ 25 日 (日) (2泊3日)
- 【会 場】 国立江田島青少年交流の家
- 【対 象】 小学校 4 年生から中学校 3 年生
- 【参加者数】 (1) 春キャンプ 57 人
(2) 夏キャンプ 76 人
(3) 秋キャンプ 60 人
(4) 冬キャンプ 75 人 延べ 268 人

【企画・運営のポイント】

- (1) 青年ボランティアグループ「カッターズ」が毎週ミーティングを行い、事前キャンプにおいて準備を行う。また、担当企画指導専門職が、月 1 回程度ミーティングに参加して、活動内容に対する指導助言をする。そして、「カッターズ」が自主的に行う事前キャンプで課題を改善し、キャンプの運営に反映させる。
- (2) 年 4 回開催し、当交流の家が持つ豊かな自然環境を生かし、春・夏・秋・冬のそれぞれの季節感を感じることができるプログラムを組む。
- (3) 参加者の積極性や思いやりを引き出すために、異学年及び異年齢を考慮した男女のバランスの良い班編成をし、役割が生まれ、それぞれが協力できるようなプログラムを計画する。
- (4) 参加者が興味・関心をもてるように開会セレモニーで始まり、多彩なプログラムを体験した後、閉会セレモニーでキャンプを締めくくるストーリー性のあるキャンプ構成にする。また、閉会セレモニーでは、参加者の活動中の様子を V T R で流し、参加者全員でキャンプの振り返りを共有できる場面を設ける。

【活動の実際】

(1) 春キャンプ

平成 28 年 6 月 4 日 (土) ～ 5 日 (日) (1泊2日)

6月4日(土)	6月5日(日)
<ul style="list-style-type: none"> ・開会セレモニー ・ピクニック ・オリエンテーリング登山 ・歌カプラ 	<ul style="list-style-type: none"> ・野外炊事 ・スポーツ ・閉会セレモニー

- ・ 開会セレモニーでは、初めて参加した子も自己紹介ゲームやレクレーションを通して、すぐに打ち解け、班のメンバーを中心に仲良くなっていた。スタッフの中にも、初めて子供たちと接する者がいたが、皆笑顔で接し、明るく和やかな雰囲気をつくることができていた。
- ・ オリエンテーリング登山やスポーツ、野外炊事等、班のメンバーが協力して行うプログラムを取り入れることで、自然と仲間意識を生み出し、楽しみながら打ち解けることができるように工夫した。



開会セレモニー



歌カプラ



野外炊事

(2) 夏キャンプ

平成 28 年 8 月 7 日 (日) ～ 9 日 (火) (2泊3日)

8月7日(日)	8月8日(月)	8月9日(火)
<ul style="list-style-type: none"> ・開会セレモニー ・クラフト ・野外炊事 	<ul style="list-style-type: none"> ・海水浴 ・流しそうめん ・キャンプファイアー 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーリング ・閉会セレモニー

- ・ 気温の上昇を考慮し、活動間に長めの休憩を取ったり、こまめに水分補給の時間を取ったりしながら体調面に気を付けてキャンプを進めた。その結果、体調不良を訴える者もほとんどなく、キャンプの全日程を終了することができた。
- ・ キャンプの全日程を通してのスタッフの確保が困難であり、3泊4日を予定していたが、安全面を考慮して、2泊3日に日程を短縮して行った。しかし、活動内容は充実しており、子供たちも積極的に活動に参加し、楽しむ姿が多く見られた。活動の中で、一人一人の子供に役割が生まれるように配慮し、自分の役割を最後まで果たさせるようにした。子供たちは、班のメンバーやスタッフと協力しながら、なんとか自分の役割を最後まで果たそうとがんばった。最後までやり通すことを通じて、子供たちは達成感を味わい、自己存在感が高まった様子であった。



クラフト



流しそうめん



オリエンテーリング

(3) 秋キャンプ

平成 28 年 10 月 8 日 (土) ～ 9 日 (日) (1泊2日)

10月8日(土)	10月9日(日)
・開会セレモニー ・運動会 ・ナイトウォーク	・野外炊事 ・閉会セレモニー

- ・ 秋の自然を身近に感じる事のできるプログラムになるように心がけた。また、心地よい秋の自然を肌身を持って感じられるように、野外での活動を多く取り入れた。
- ・ 野外炊事では、食を通して秋の旬を感じさせようと、メニューの中にさつま芋を使ったものを取り入れ、ナイトウォークでは、途中で集めた落ち葉やドングリ、小枝を使って作品を作るセクションも設け、日ごろ自然体験の少ない子供たちが季節感を感じられるようにした。



運動会



ナイトウォーク



閉会セレモニー

(4) 冬キャンプ

平成 28 年 12 月 23 日 (金) ～ 25 日 (日) (2泊3日)

12月23日(金)	12月24日(土)	12月25日(日)
・開会セレモニー ・レクスポ ・野外炊事	・クラフト ・サイクリング ・登山 ・キャンドルのつどい	・野外炊事(おやつ作り) ・閉会セレモニー

- ・ キャンプ中にクリスマスを迎えるということもあり、2日目には、クラフトでキャンドルづくりを行い、夜にはキャンドルのつどいを行った。その中で、クリスマスの歌を歌ったり、クリスマスをイメージできるゲームをしたりした。キャンドルのつどいでは、幻想的なろうそくの炎を見つめながら一人一人が感想を述べ、このキャンプが最後となる中学3年生の参加者が、スタッフに向けて感謝の気持ちを述べ、スタッフが涙する感動的な場面も見られた。
- ・ サイクリングでは、寒さに負けず一生懸命に自転車をこぎ、明るい笑顔がたくさん見られた。
- ・ 季節柄、体調面を配慮し、健康観察や検温をこまめに行い、子供たちの体調管理に気を付けた。また、食事前の手洗い・うがいや消毒等を徹底して行った。



サイクリング



キャンドルのつどい



参加者を見送るスタッフ

【成果】

- (1) 事前のミーティングやキャンプを通して、プログラムや参加者に対する共通理解を深めることができ、キャンプに十分備えることができた。また、「カッターズ」の代表と担当企画指導専門職で連携を図ることで、企画・運営に対して的確な助言ができた。
- (2) オリエンテーリング、海水浴、カヌー体験、水晶山登山、サイクリング、キャンドルのつどい等、季節や当交流の家の特色を生かした活動プログラムを取り入れることで、参加者の興味・関心をひき、自然を豊かに味わうことができた。また、キャンプ参加者の満足度も高かった。
(参加者満足度：「カッターズキャンプはどうでしたか」)
・満足：90% ・やや満足：9% ・やや不満：1% ・不満：0%
- (3) 異学年と集団で寝食を共にすることで、新しい友達を得ることができ、互いを思いやる気持ちや積極的に活動しようとする態度が育った。また、スタッフの人員が十分であるため、より深い関わり合いが生まれ、参加者をしっかりと見守ることができたことも、それらの態度の育成につながった。
- (4) ストーリー性のあるキャンプ構成により、参加者は楽しみながらスムーズに人間関係をつくることができた。また、参加者とスタッフの年齢も近く、親近感をもったキャンプの雰囲気づくりをすることができ、キャンプの振り返りを共有する場を設けることで、感動をもってキャンプを終了することができた。
- (5) 広報活動の幅を広げることによって、各4回のキャンプ共に、初参加者があった。
・春：19名 ・夏：22名 ・秋15名 ・冬14名
- (6) スタッフに指導者であるという自覚が芽生え、集団生活を送る上で参加者に不適切な言動が見られたときには、毅然と指導ができるようになった。また、プログラムの実施に当たっては、課題等についてより具体的な視点をもって話し合うことができるようになった。

【今後の課題】

- (1) 「カッターズ」の意見を尊重しつつ、事業の目的を達成するために、職員が多くのスタッフを指導する必要がある。互いの意見を確認し、信頼関係を継続するために、担当企画指導専門職がさらに積極的にミーティングに出席する。
- (2) 「カッターズ」に対して、活動を楽しむと同時に、活動を通しての教育的効果、参加者に身に付けさせたい力等について具体性をもたせるように指導していく。
- (3) 保護者アンケートでは、キャンプを通して積極性や自主性が出てきたとあまり思わないという意見も見られる。グループ内での人間関係が上手くいかなかったり、初参加の参加者が、リピーターの輪の中になかなか入れなかったりした例も挙げられており、参加者を目の前にしたときの実際の指導についての対応を考えていく。